

余はベンメイす

坂口安吾

青空文庫

先日朝日評論の〇氏現れ、開口一番、舟橋聖一のところには日に三人の暴力団が参上する由だが、こちらはどようですか、と云う。こちらはそんなものが来たことがない。来る筈もありませんか。

東京新聞のY先生（なぜなら彼は僕の碁の師匠だから）が現れての話でも、世間ではもっぱら情痴作家と云つてますが、御感想いかが、と言う。すると、それから、西海と東海と東京と三つの雑誌と新聞から同じようなことを言ってきて、私の立場に就いて、弁明しろと言う。弁明など考えたこともないから、しろと云つても、無理だ。

朝日評論のO氏も弁明を書けという。まるでどうも、私が東京裁判情痴部というようなところへ引きだされて目下じんもん訊問を受けられているようにきめこんでいる様子で、私も恐縮したが、まったく馬鹿げた話である。

こうきめつけられては、てれてニヤニヤする以外に手がなくなつて、そうかね、私は情痴作家ですか、などと云うと、知友の筈のY先生まで、舟橋・織田おだも情痴作家とよばれることを厭いやがりますね、などと取りすましている。とりつく島がない。

いつだったか新潮社のS青年が現れて、サルトルは社会的責任を負うと声明していますが、あなたは如何という。この方はハツキリしていて気に入ったから、勿もちろん論だ、牢屋ろうやへでもなんでも這は

入る、と威勢のいいところを見せて、ソクラテスを気取ったものだ。じゃ、あなたも声明を書きませんか、ときたから、私も憤然として、そんなこと書くのはヤボというものだ、作家が自分の言葉に責任を負うのは当然ではないですか、決闘して死んだ男もあるですよ（ホントかね）。あんまり見上げたことではないが自殺した先生方も多々あるです。僕など生きることしか手を知らないのだから、酒となり肉体となり、時には莊周先生の如く蝶ごちようともなれば、ここに幻術の限りをつくして辛つらくも生きているにすぎない。あに牢獄を、絞しばり首を怖おそれんや。絞しばり首は恐おそれ入いるけれども話の景気というもので、ザツとこういうぐあいには御返事申上げた。だいたいサルトルが書いたから私にも書けとは乱暴な。先日酔っ払

つて意識不明のところを読売新聞の先生方に誤魔化されて読みもしないサルトルにつき一席口上を書いたのが運の尽きで、改造だの青磁社だのまだ出来上らないサルトルのほんやく翻譯のゲラずり刷だの原稿だの飛び上るような部厚な奴を届けて汝なんじあくまで読めという。これ実に、人泣かせの退屈きわまる本ですよ。街頭で酒店で会う人ごとにサルトルはいかかしてくる。まるで私が今サルトルと別れてフランスから帰ったような有様だから、私もつい癩しゃくにさわって、うん、シロで、サルトルとシャンパンにカレイのヒレを落してオカンをした奴をのんだよ、うまくなかったね、然しかし実存主義よりはいくらか清潔な飲み物でした、などと言う。すると中には、へえ、シロってのは何ですか。君シロを知らないですか。プルウス

ト先生行きつけのパリきつての上品なレストランです。ここでシヤンパンを飲んだのは日本人で拙者ぐらいのものですよ、とおどかす。すると、へえ、あなたが、と云つて、私の行きつけの怪しき飲み屋の怪しき構えを改めてジロジロ見まわしたり、又は私の怪しき洋服に目をつけたりする。巴^{パリ}里へいついらつしやつたんですか、ときくから、君冗談じゃないぜ、僕は日本にいくらもいやしないよ、戦争になつて、やむなく交換船で追いつ返されてきたのだ、実存主義なんて八、九年前に僕がモンマルトルの屋根裏で寝言のつもりで言いだして、今はもう忘れてしまったんだ。執念深く覚えているのはサルトルぐらいのものだぜ、と云つて、あとはクダをまいてしまふ、というテイタラクである。

作家は弁明を書くべき性質のものではない。書くが如くに行い、行うごとく書き、わが生存、わが生き方がそこに捧げられているのであるから、他の何物を怖れるよりも、自我自らを偽ることを怖れるものであり、すべてが嚴たる自我の責任のもとに書き表さされていること、元より言うまでもない。社会的責任の如き屁への河か童つばではないですか。論ずるだけがヤボであり、そういう文学以前の問題にかかずらつて一席弁じるサルトル先生も情なさけない先生だが、作家に向い弁明などと注文せられる向きの編輯へんしゅう者諸先生は先ずもつ以て三思三省せらるべし。

諸君は各々の家おいに於て日常何をしておられるか？ 思うに諸君（以下、君の中には女の方も入れていますから）は、父であり、

母であり、子であり、良人おとこであり、細君であり、恋人であり、諸君またも亦、男女の道を行われること当然ではないか。かかる私事は之これを人前にさらけだすべきものではなく、礼儀に於て、常識に於て、そうである如く、如何いかなる破壊混乱の時代に於ても、かかる表出は礼儀化されぬ性質のものであるかも知れない。貝原益軒ん先生は只ただいま今房事中と来客を断られた由であるが、私はこういう聖人賢者は好きではない。こんなところは何も正直に言うこととはないさ。只今所用があるからぐらいで充分で、こういう惨みじめな正直づらは、私はイヤだ。

文学はこういう芸のない正直とは違う。こういう時には嘘うそをつく人生を建前とするのが文学のもとめる真実です。

だが、諸君は各々の私事に於て、正しいこと、自ら省みて正しいと信ずることを行つていられるか。諸君は信じておるかも知れぬ。然し、それが、自ら省みること不足のせいであり、自ら知ること足らざるせいであることを、そうではないと断言し得るや。カトリックに於ては、善人は天国へ、悪人は地獄へ、生れたばかりの赤ん坊は煉獄れんごく（ピュルガトワル）へ行きます。日本では普通、煉獄を地獄よりももつと悪い所のように考えているが大間違いで、ピュルガトワルとは天国と地獄の中間、即ち善すなわならず悪ならず、無の世界で、赤ん坊は善悪に關せざる無だから赴おもむく。私自身の宗教に於ては、赤ん坊だけではない、自ら省みて恥まねなしなどという健康者はみんな煉獄へ送つてしまう。人間の真似まねをしてい

る人形だから。

諸君は夫婦であり、恋人達だ。諸君は男女の道を、恋人の道を行い、満足ですか。不安ではないのですか。平気ですか。幸福ですか。

快樂ほど人を裏切るものはない。なぜなら、快樂ほど空想せられるものはないから。私の魂は快樂によつて満たされたことは一度もなかった。私は快樂はキライです。然し私は快樂をもとめずにいられない。考えずにいられない。

諸君は上品です。私事に就ては礼儀をまもつて人前で喋しゃべらず、その上品さで、諸君の魂は眞実ゆたかなのだろうか、眞実高貴なのだろうか。

すべて人間の世界に於ては、物は在るあのではなく、つくるものだ。私はそう信じています。だから私は現実に絶望しても、生きて行くことには絶望しない。本能は悲しいものですよ。どうすることも出来ない物、不変なもの、絶対のもの、身に負うたこの重さ、こんなイヤなものはないよ。だが、モラルも、感情も、これは人工的なものですよ。つくりうるものです。だから、人間の生活は、本能もひつくるめて、つくる事が出来ます。

私は童貞のころ、カーマストラを読み、アナーガンガを読んだ。そこに偉大な真実、現実の哲理が語られているかと思つて、何本よりも熱意に燃えて読んだほどだった。

私は近頃発禁になつたという「猟奇」だの「でかめろん」だの

「赤と黒」だの「りべらる」を読む人々が、健全にして上品なる
人士よりも猥わいセツだとは思わない。私も、もし、カーマスツトラ
を読んだ頃のこの現実には絶望しない童貞の頃だったら、まっさき
に、これらの雑誌を読んでみたに相違ない。不幸にして、今も
う読んでみる気にもならないです。私の方が、よっぽど、その道
の達人なんだから。すくなくとも、私は退屈しているのです。

春しゅんぼん 本

本を読む青年子女が猥セツなのではなく、彼等を猥セツ
と断じる方が猥セツだ。そんなことは、きまりきっているよ。君
達自身、猥セツなことを行っている。自覚している。それを夫婦
生活の常道だと思つて安心しているだけのことさ。夫婦の間では
猥セツでないと思つているだけのことですよ。誰がそれを許した

のですか。神様ですか。法律ですか。阿呆^{あほ}らしい。許し得る人は、ただ一人ですよ。自我！

肉体に目覚めた青年達が肉体に就て考え、知ろうとし、あこがれるのは当然ではないか。隠すことはない。読ませるがよい。人間は肉体だけで生きていたのではないのです。肉体に就て知ろうとすると同じように、精神に就て、知ろうとし、求めようとすること、当然ではないですか。

「猟奇」「でかめろん」等々を読ませた方が、そういうものに退屈させる近道だ。読まなければ空想する。そしていつまでも退屈しない。読ませれば、純文学のケチなエロチシズムなどには鼻もひっかけなくなるから、文学は純化され、文学の書き方も、読み

方も正しくなり、坂口安吾はエロ作家などという馬鹿げた読み方もしなくなるだろう。

舞台でも、そう。露出女優や露出ダンスがハンランすれば、芸術女優の芸術的エロチシズムは純化され、高められる。

露出だの猥本などというものは、たちま忽ち、あきてしまうものですよ。禁止するだけ、むしろ人間を、同胞を、ぶじよく侮辱しているのです。そういう禁止の中で育てられた諸君こそ、不具者で、薄汚い猥漢で、鼻もちならない聖人なのだ。人間は本来もつと高尚なものだよ。肉体以上に知的なものですよ。露骨なものを勝手に見せ、読ませれば、忽ちあいて、諸君のような猥漢は遠からず地上から跡を絶つ。

肉体なんか退屈ですよ。うんざりする。退屈しないのは、原始人だけ。知識というものがあれば、退屈せざるを得ないものだ。快樂は不安定だというけれども、犬だの野蛮人の快樂は不安定ではないので、知識というものが、不安定なのです。

結婚するなら、肉体に退屈してからやりなさい。否、^{いな}結婚ぐらい、なんべんやりなおしてもよいではないですか。退屈するまで、やり直しなさい。最も、やり直すのが面倒くさかったら、やり直す必要はないです。これ又見上げた心、^{こころがけ}掛^{かけ}だな。本当に、面倒くさかったら、ネ。女房を追い出すのは面倒だが、会社へ行くのは面倒ではない、などというのは、インチキですよ。徹底的に面倒くさいという人は、多分、一番偉いんだらう。そのくせ、飯を

食うなんて、どうも、イヤだな。

失礼しました。私はまったくダメです。なぜなら、私は教師ではない。私は生徒です。そのくせ、一場のお説教に及んだ度胸はあさましい。

私は、ただ一個の不安定だ。私はただ探している。女でも、真理でも、なんでも、よろしい。御想像にお任せする。私はただ、たしかに探しているのだ。

然し、真理というものは実在しない。即ち真理は、常にただ探されるものです。人は永遠に真理を探すが、真理は永遠に実在しない。探されることによつて実在するけれども、実在することによつて実在することのない代しろもの物です。真理が地上に実在し、真

理が地上に行われる時には、人間はすでに人間ではないですよ。人間は人間の形をした豚ですよ。真理が人間にエサをやり、人間はそれを食べる単なる豚です。

私は日本伝統の精神をヤツツケ、ものあわれ、さび幽玄の精神などを否定した。然し、私の言っていることは、真理でも何でもない。ただ時代的な意味があるだけだ。ヤツツケた私は、ヤツツケた言葉のために、欺瞞ぎまんを見破られ、論破される。私の否定の上に於て、再び、ものあわれは成り立つものです。ベンシヨウハウなどという必要はない。ただ、あたりまえの話だ。人は死ぬ。物はこわれる。方丈記の先生の仰おっしや有る通り、こわれない物はな

い。

もとより、私は、こわれる。私は、ただ、探しているだけ。^{なんじ} 汝、なぜ、探すか。探さずにいられるほど、偉くないからだよ。面倒くさいと云つて飯も食わずに永眠するほど偉くないです。

私は探す。そして、ともかく、つくるのだ。自分の精いっぱい物を。然し、必ず、こわれるものを。然し、私だけは、私の力ではこわし得ないギリギリの物を。それより外に^{ほか}仕方がない。

それが世のジュンプウ良俗に反するカドによつて裁かれるなら、私はジュンプウ良俗に裁かれることを意としない。私が、私自身に裁かれさえしなければ。たぶん、「人間」も私を裁くことはないだろう。



私はここまで書いてきて、やめるつもりであつたが、余はベンカイしない、などと云つて、結構ベンカイに及んだ形であるから、憤然として、ペンを握つた。

今はもう、夜が明けるところです。私は目下、長篇小説に没頭しているのだ。だから約束した諸方の原稿を全部お断り願ひ、延期していただいたという次第なのに、朝日評論の〇先生だけ、頑として、実に彼は岩石です。女の子も、これほどツレないものではない。おかげで私はヒロポンをのみ、氣息エンエン。氏は実に二日目毎ごとに四回麗人の使者を差向け、最後に、遂ついに、氏自ら現れ

て脅迫されるに及んで、私も泣いた。これ実に本日白昼の出来事です。大悲劇です。

私は聖徳太子ではないのだから、頭は一つ、手は一本（ペンを握る手はですよ。両手はきかないよ）昨日は昨日で、東京新聞のタロちゃんなる重役先生が何食わぬ顔をして、余の仕事ぶりを偵察にきて、エヘラエヘラ帰って行った。私も遂に探偵につきまともわれる身となつて、近頃は心臓が心細くて仕方がないのだから私はベンカイなどは断じてイヤだと言うのだが、環境の悪化のせいで、ダメでした。

ちようど一番電車が通つたから、私も一つこのへんから、大攻勢にでてやろう。夜明けはある、私にも。たぶん、アルデシヨウ。

私は希望に生きるですから。

小説を読むなら、勉強して、偉くなつてから、読まなければダメですよ。陸軍大將になつても、偉くはない。総理大臣になつても、偉くはないさ。偉くなるということは、人間になるということだ。人形や豚ではないということですよ。

小説はもともと毒のあるものです。苦悩と悲哀を母胎にしているのだからね。苦悩も悲哀もない人間は、小説を読むと、毒蛇に噛かまれるばかり。読む必要はないし、読んでもムダだ。

小説は劇薬ですよ。魂の病人のサイミン薬です。病気を根治する由もないが、一時的に、なぐさめてくれるオモチャです。健康な豚がのむと、毒薬になる。

私の小説を猥セツ文学と思う人は、二度と読んではいけない。
あなたの魂自身が、魂自体のふるさとを探すようになる日まで。

私の小説は、本来オモチャに過ぎないが、君たちのオモチャではないよ。あっちへ行つてくれ。私は、もう、ねむい。

青空文庫情報

底本：「墮落論・日本文化私観 他二十二篇」岩波文庫、岩波書店

2008（平成20）年9月17日第1刷発行

2013（平成25）年4月5日第6刷発行

底本の親本：「坂口安吾全集 05」筑摩書房

1998（平成10）年6月20日

初出：「朝日評論 第二卷第三号」

1947（昭和22）年3月1日

入力：Nana ohbe

校正：酒井裕二

2015年12月13日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

余はベンメイす

坂口安吾

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>